

赤ん坊を背負い、二人の子を抱き、

息をのむ

北海道 佐藤 静子

樺太北緯四十七度線、逢坂と蘭泊の村道にある富沢という部落に、夫は校長で家族が住むようになって四年、終戦も間近い昭和二十年七月初めから、約百二十人の日本軍の駐屯部隊が来ていた。

終戦後の八月二十日の朝ドド……ドと連山をゆるがせ、地面を震わす。

「艦砲射撃だ！機銃の音だ！」

隊長と下士官は窓を開けて叫ぶ、私は全身を何かが走るのを覚えた。

真岡中学一年の長男は前日友人と真岡へ行き、帰っていない。

「あれは真岡だ、艦砲射撃に間違いない」山下隊長の態度にも、いつもと違った動揺のいろが走った。

砲声は日暮れまで絶え間なく続いた。

ついこの間十五日に終戦の詔勅を聞いたばかりで戦いは終わった筈なのに。

学校の教室には避難民が集まり、家族の安否を気にかけ右往左往、辺りは緊迫した空気に急変した。

隊長の命令で家族達は窪田の山へ避難した。二機のソ連戦闘機から弾の雨が降る。

三家族十七人は落の葉かげに身を隠し、生きた心地はしなかった。

翌二十二日早朝、豊原へ避難するようにと、軍からの伝達があったが、爆音と射撃が激しく、生きているのが不思議なくらい、日中の移動はむずかしいので夜を待った。

通らなければならぬ逢坂の空は真っ赤だった、私は長男を案じ、夕暮れの坂道を一目散に走って、我が家に飛び込み、見ちゃん、見ちゃん、声は闇にこだまするばかり、悲しみは潮のようにこみ上げ、涙で見た柱時計は八時五十五分、二十二日を最後に我が家を捨てて、泣きながら夜を走った。

捨てられた家々の窓は異様に光り、村は湖底のように静まり、私達はこの村の最後の避難民という悲惨な境遇となつてしまつた。

夜空を焦す炎の街に向かつて二台の馬車を先頭に、三家族は黙々と進む、逢坂に近づくにしたがい、激しい人声、泣き叫ぶ声、肉親を呼び合う声、バリ／＼燃える街をさまよう人影は火の粉の中に数知れず、まさに逢坂は戦場であつた。

夫は四歳の子を背負い、私は赤ん坊を背に、二人の子をかき抱き、息をのんだ。

しかし避難民となつたいま、火に追われ、血にまみれようとも、行きつくところまでは行かなければ……。進むな、危険だ、軍の号令に前進を止められた、赤い舌はメラ／＼と街をなめているかのように燃えている。

兵隊のうわすつた声は火の中で狂つたように飛び交う、人々は泣き叫ぶ、街は地獄絵そのものであつた。

この一発は身を守る、敵の捕虜になる前に死ぬのだ、さあ行け……。四人の兵士は受け取つた手榴弾を抱い

て、直立不動、某一等兵が行つて来ます、と火の街を走り去つた。

その姿には人間を超越したものを感じ、私の左耳は兵士の、右耳は燃え狂う凄まじい音を、電柱に火が走る、火の粉、火の木片が飛ぶ、子等は恐怖に泣き叫ぶ、進め、進め、馬はいななき、あばれ何台もの馬車は狂つたように走り出す。

焼けて垂れ下つた電線に足を取られ、走つては転んだ。数知れぬ避難民の群は、地獄の道を走り続けた。

夜空を焦す炎の中に、軍の号令はなおも統いていた、いつ出たのか月は冴え／＼と冷たく地上の戦いを嘲笑うかのように照らしていた。

「走れ、走れつたら、何してる、ホラ走れ」馬を追う男の声、早く早く逃げるんだ、殺されるぞ、その声は人々の心を揺さぶつた、私達は食もなく、一睡もせず、子を背負つて人波に押され／＼歩き続けた。

馬は鼻の穴を大きく開き荒々しく息をはく昨日今日と炎天下に一滴の水もなく、人も馬も疲労の限界を超え死んで行つた。

荷車から解放された馬は走る気力もなくヨロ／＼と来た道を戻る馬もいた。

逃げ歩いた道程は五十キロ、山道には捨てられた衣類、夜具、骨つば、位牌まで……辺りは夕闇が迫っていた頃、辿り着いたところは軍川の山奥く流送飯場であつた。

食糧もなく、翌々日、日本の憲兵が来て、気の荒いソ連軍が真岡へ上陸したと言う、山へ逃げて一夜を明かした、鳥の羽ばたきにも脅えながら息を殺していた。

夜なか中、山道を通る足音、ピュー／＼と吹く口笛、馬のいなゝきと車の走る音、話し声、恐ろしい野宿が何日続いたことか。

敗戦と云う混乱の最中で、目に見えぬ何かに守られて生きぬいた事を感謝せずにはいられないのであつた。

崩れた丸太と共に川に転落・瀕死の重傷

北海道 金田 善太郎

私が樺太に渡つたのは大正十五年八月である、釧路市鳥取町の富士製紙株式会社に入社知取工場に配属となつた。

昭和四年三月、西海岸の恵須取町に新工場が新設されるので、技術者というので命に依り転勤するため三月十七日知取出発、単身赴任である。

多数の友人に見送られ知取駅を出発、真縫駅にて下車、これより横断の山道へと向かう、馬ソリに乗って約二十八キロ、ここを五時間ばかりで山越えをし西海岸の久春内という村に着く、午後七時頃と思う、東海岸に比較すると下着一枚は暖かい、この夜はゆっくりと休む。

翌朝は早い午前六時出発、三月では未だ暗い、次の